キラキラ輝く女性医師 第10回

いきいき活躍し続けるための
キャリアマネジメント＆ライフサポート

大阪市立大学大学院 医学研究科
病理病態学 教授
大阪市立大学医学部附属病院
女性医師・看護師支援センター長
上田真喜子

女性医師のキャリアアップと子育てとの両立支援

私達の時代

私は昭和50年（1975年）、千葉大学医学部を卒業して、その後子育てをしながら35年あまり医学の道を歩んでまいりました。私達が育った時代は、「女性は結婚したら仕事を辞める」というのが常識でした。昭和40年代前半、東京都立日比谷高校に学んでいた私は、よくクラスメートの女子と進学や結婚についての悩みを話したものでした。その当時は、「女のくせにそんなことをするのか」「女のくせにこんなことをしてはいけない」と言われることがよくありましたし、「女性は短大を卒業して、会社で数年間働き、25歳頃までに勤めを辞めて家庭に入るのが理想」と言われていた時代でもありました。そういう時代のなかで、公務員、医師、教師であれば女性も仕事を続けることができると考えられていました。

私が大学を卒業した昭和50年頃は、女性医師が1割以下の時代であり、女性医師が臨床科へ入局を希望したり、大学院に進学希望したりしても、「うちの科は女性医師が入局することは望みません」と言われることは珍しくありませんでした。当時は、「女医お断わり」という言葉で代表されるように、医学・医療界は男性中心の社会でした。

小児科医から心臓血管病理学研究の道へ

ふり返ってみて、私が病理学の道に進むことになったきっかけは、千葉大学医学部在学中の岡林 篤教授との出会いでした。岡林 篤教授との最初の出会いは、千葉大学での病理学総論の系統講義でした。岡林先生の講義はとても印象深いものであり、「研究上の問題を明らかにするために毎日考え続けている」という岡林先生の病理学者としての思いや姿勢が伝わってくる講義でした。

昭和50年、千葉大学を卒業した私は小児科医となりました。東京の三井記念病院小児科での研修を終えた後、夫の転勤に伴って大阪大学医学部小児科に入り、昭和53年、関連病院であるガラシア病院小児科（大阪府箕面市）の勤務となりました。その後、どこかの大学院で博士号取得を、という話になったとき、千葉大学医学部同窓会関西支部の先輩達が、「大阪市立大学の第一病理に岡林篤先生のお弟子さんの藤本輝夫教授がいらっしゃるのでそこに行ってみてはどうか」と勧めてくださいました。

昭和54年、大阪市立大学第一病理の大学院生になった私は、岡林 篤先生が、大阪市立大学第一病理の初代教授でいらっしゃったことをはじめて知り、出会いの不思議さを感じました。大学院で病理を勉強していた頃、先輩の病理の助手の先生が辞め、空席ができるので、教授から大学院を辞めて助手になるようにという話があり、私は昭和55年に病理学助手になりました。昭和55年秋、大阪市立大学第一病理の30周年の記念式典で、私は岡林先生と再会しました。岡林先生は、千葉大学の教え子の私が、偶然にも、御自身が創設された大阪市立大学第一病理で病理学を学んでいることを、たいそう喜んでくださいました。その頃、すでに千葉大学を退官されていらした岡林先生は、京都下鴨の御自宅から大阪市大病理にもよく訪ねてくださり、多くのことを教えてくださいました。昭和58年、私はオランダのアムステルダム大学病理学教室のBecker教授の元へ留学して、心臓血管病理を研究することとなり、その後は心臓血管病理、特に動脈硬化の病理やインターベンション病理を中心に研究を続けてきました。そして、昭和60年に大阪市立大学医学部病理学講師、平成5年同助教授、平成10年に同第二病理（現病理病態学）教授となり、現在に至っております。

院内保育、母乳育児を続けて仕事と両立

昭和62年7月に長男を出産しましたが、私は教員としての講義がありましたので、産休明けの9月から出勤しなければなりませんでした。当時、大阪市立大学医学部附属病院内には組合が経営するカンナ院内保育所がありました。その対象は看護師でしたが、空きがあれば教員も使えるということで、幸いにこの院内保育所に子どもを入所させることができ、たいへんありがたく思いました。院内保育所では、朝授乳して、昼休みそして午後3時に授乳に行き、帰ってから授乳するということで、母乳育児をしながら仕事を続けることができるということを体験しました。1歳7カ月のときに地域の保育所に空きができたので、その保育所にお世話になりました。小学校1年生から3年生までは学童保育に預け、お手伝いさんに掃除と洗濯だけを任せ、食事は私が作るということに決め、これを実行しました。午後5時にお手伝いさんに学童保育に迎えに行ってもらい、私が帰る午後7時頃まで子どもを見てもらうということを続けていました。帰宅後に私が食事を作り、子どもと一緒に食べることは、毎日の私自身の喜びの時間でもありました。中学・高校時代も、朝食と夕食は一緒に食べ、昼の弁当も作る、ということを続けました。子どもが小さい頃は、だいたい9時頃には寝るので、それ以後はまた私の時間になり、研究室の仲間もこれを知っていて、連絡その他を頻繁に行うという生活でした。子どもはその後、医学部へと進み、平成25年度からは研修医になる予定ですので、私もやっと肩の荷が下りた気持でおります。このように、私が育児をしながら仕事ができたのは、保育所、学童保育の方々はもちろん、お手伝いさん、夫、そして両方の両親など、いろいろな人達の援助があったおかげでした。

大阪市立大学医学部附属病院における女性医師支援の取り組み

女性医師が能力を活かして長期にわたって生き生きと働き続けるためには、「仕事の喜び・達成感」と「家庭や子育ての喜び・達成感」との両立を実感できる就労環境や就労システムが必要です。私どもは、8年ほど前から「大阪市女性医師ネットワーク」を設立し、さまざまな活動を展開してきております。この大阪市女性医師ネットワーク（会長：上田真喜子）は、大阪市立大学医学部と大阪市の市民病院群に関連をもったことのある女性医師および女子医学生を中心に組織されており、「60代の女性医師から女子医学生までの世代を超えた縦のつながり」と、「地域の数多くの病院勤務の女性医師や開業している女性医師から成る横のつながり」をもっている点が特徴です。このネットワークを活用し、大阪市立大学医学部附属病院では地域の医学部関連病院や市民病院群と連携しながら、子育てとキャリアアップの両立が図れる女性医師支援システムの構築を目指して、文部科学省の支援をもとに、「大阪市立大学医学部附属病院 女性医師・看護師支援センター（センター長：上田真喜子）」を設立しました。同センターは、平成19年度に、院内保育所の拡充、病児保育の開始（図1）、子育て中の女性医師を対象にした柔軟な勤務制度の導入などを実現してきており、そのほかにも、表に示すように、多くの具体的な成果をあげてきております。また、広報・啓発活動にも積極的に取り組んで多くのシンポジウムやフォーラムを開催してきており、平成21年には、国際シンポジウム「医学・医療における男女共同参画に向けたアクションプラン（Active Programs for Gender Equality in Medicine）」を開催して好評を博しました（図2）。このような女性医師支援策の推進により、大阪市立大学医学部では、出産や子育てなどが原因で仕事を中断したり退職したりする女性医師はなくなりました。

学会活動と女性医師支援

学会活動としては、私は日本動脈硬化学会理事を平成13年から続けており、平成19年には第39回日本動脈硬化学会総会・学術集会の会長もさせていただきました。また、日本病理学会の理事は平成20年からつとめており、男女共同参画委員会を立ち上げることができました。そして平成24年からは、日本循環器学会理事になり、男女共同参画委員長として、現在、女性循環器医の就労環境の改善プロジェクトにも取り組んでおります。専門性や緊急性の高い分野である循環器領域でも、女性医師が子育てをしながら生き生きと仕事を継続することができるような勤務システムをぜひ構築したいと願っております。

表 大阪市立大学医学部附属病院女性医師・看護師支援センターのこれまでの実績

1 院内保育所の拡充 1）延長保育（朝7：30から、夜20：00まで） 2）土曜日・休日の一時保育
2 母乳育児の推進
3 病児保育開始
4 子育て中の女性医師を対象に柔軟な勤務制度の導入 1）短時間勤務制度 ・「医員」として雇用し、短時間勤務ができるようにする 2）当直免除・残業免除
5 女性医療人のための病児保育地域ネットワークの構築
6 女性医師・看護師の復帰支援 ・スキルスシミュレーションセンターでの実技研修提供 ・e-ラーニングシステムを活用した自宅での復帰研修
7 海外への現地調査（アメリカ、オランダ、スウェーデン）

図2 国際シンポジウム『医学・医療における男女共同参画に向けたアクションプラン』の座長

図1 院内保育所「カンナ」「たんぽぽ」

図3

大阪府医師会 女性医師支援プロジェクト
―Gender Equality―
基本スキーム

大阪府医師会理事　上田真喜子

平成22年8月26日、大阪府医師会男女共同参画検討委員会承認

医師会活動と女性医師支援

平成22年からは大阪府医師会理事（学術・勤務医・男女共同参画担当）としても活動することになりました。また同時に、日本医師会代議員や日本医師会の男女共同参画委員会、勤務医委員会、生涯教育委員会などの委員の仕事も加わりました。大阪府医師会では現在、「大阪府医師会女性医師支援プロジェクト―Gender Equality―」を、大阪府医師会の11地域ブロックから選出された合計157名の委員の先生方とともに推進しております（図3）。本プロジェクトの詳細については、大阪府医師会ホームページを参照していただきたいですが、1）子育てとの両立支援と2）キャリアアップの支援を2つの大きな柱としております。「子育てとの両立支援」では、①子どもを院内保育所あるいは近隣の保育所に預けることができるようにする、②子どもが病気のときは、院内病児保育所あるいは近隣の病児保育所に預けることができるようにする、③子どもが小さいときの一定期間は、残業免除、当直の免除あるいは回数軽減、短時間勤務などの柔軟な就労形態を提供する、などを進めております。また「キャリアアップの支援」では、大学や病院における女性医師のキャリア形成と昇進に関しては、男性医師と同等の機会を与え、男性医師と平等に評価・処遇していくという、いわゆる「Equal Opportunity」と「Equal Treatment」を実行してほしいという方向性を打ち出しております。

おわりに

私の経験から言っても、①保育所、②病児保育、③柔軟な勤務体制 のいわゆる3点セットがあれば、女性医師の仕事と子育てとの両立は可能だと思います。女性医師が今後ますます増加していくことは間違いなく、医学・医療界が女性医師支援策を積極的に推進していくことにより、女性医師がさらに活躍できる明るい未来が来ることを確信しております。

Profile 上田 真喜子（うえだ　まきこ）
1975年 千葉大学医学部卒業／1998年 大阪市立大学医学部第二病理（現 病理病態学）教授／2007年 大阪市立大学病院女性医師・看護師支援センター長／2010年 大阪府医師会理事